

# 日本文化部会 I

## —概要—

荒木 夏乃\*

下記の通りご報告申し上げます。

日時：2013年12月16日（月）11：00～17：00

場所：お茶の水女子大学 文教育学部1号館

1階 大会議室

責任者：宮内貴久先生（午前）

中野裕考先生（午後）

高島元洋先生

日本文化部会 I は、2日目の日本文化部会 II でお話しなさる予定でした Florent Debouverie さんがこちらに変更となったため、8名によって発表が行われました。長時間の部会となりましたが、参加者も多く、盛況でありました。以下にそれぞれの発表内容をまとめさせていただきます。

### 1. 趙沼振さん（淑明女子大学校）

#### 「団塊の世代の抵抗精神に関する一考察 —1960年代後半の全共闘運動を中心に—」

趙さんは、1960年代後半の全共闘運動以降、大規模デモがあまり起こらなかった日本社会において、近年登場した「脱原子力発電運動」に注目されました。そして、このデモの特徴として、かつて全共闘運動を起こした中高年層によって行われているという事、即ち若い世代の参加者が少ないという事をご指摘くださいました。団塊の世代の抵抗精神を学ぶ事によって、格差等によって自閉的になり、社会から逃避していく若者たちの問題を解決しようと試みたご発表でした。

### 2. Jan SYKORA 先生（カレル大学）

#### 「「もてなし」としての社会的排除 —日本におけるホームレスの問題を中心に—」

SYKORA 先生は、まず、社会学において重要な、社会的排除の概念をご紹介くださいました。そしてこれが見られる事例として、日本の近世におけるホームレス問題を挙げられました。先生は、近年この問題が悪化している様子を以下の観点—即ち、2008年以降に見られる非正規雇用者数の拡大や、失業率の上昇といった経済的なフレームワーク、雇用保険法に見られる政治的・法的なフレームワーク、格差社会化という社会的なフレームワークなど—から分析されました。

### 3. 李亜さん（北京外国語大学）

#### 「幕末の陽明学と梁啓超」

梁啓超は、日本の明治維新を中国の近代化に活かそうと試みた人物です。李さんは、梁啓超が、明治維新の成功を、幕末の志士たちによる奮闘のたまものであると評価した事や、彼らの精神の源として、陽明学に着目した事を紹介してくださいました。その上で、梁啓超による陽明学理解を、「至誠」や「尚武」、「心力」などのキーワードで解明されました。「明治の陽明学を通して、幕末の陽明学を最も早く発見した近代中国の知識人が梁啓超である」、との立場から、彼の思想が、当時そして後世の中国知識人たちに多大な影響を与えた事もご指摘くださいました。

\* お茶の水女子大学大学院生

#### 4. 黄于菁さん（国立台湾大学）

##### 「荻生徂徠の礼義思想の検討」

黄さんは、「道」「仁」といった概念を踏まえながら、荻生徂徠が「礼義」を提唱した目的を2つ挙げられました。ひとつは、「日本朱子学や仁齋学といった、内在性・道徳に傾く思想に対抗して、外在的社会を中心にした思想を主張する事」であり、もう一つは、「自らの思想を、治国の方策と結びつける事」です。荻生礼義の合理性を確立し、そこから派生した礼楽制度を、安天下の理念とした、という、思想の流れを指摘されたご発表でした。

#### 5. 小林加代子さん（お茶の水女子大学）

##### 「近世日本における武士道と食事作法」

小林さんは、戦闘者としての武士の本質が、礼儀作法において、どのような形で表現されたのかをご報告なさいました。さまざまな人物の著作から、食事における礼儀を述べたキーワードを抽出し、大道寺友山の「勝負の気」や、山鹿素行の「威儀」、山本常朝の「閑か」なる「強み」といったものを挙げられました。小林さんはこれらの言葉から、一切の隙を見せず礼儀正しくある事、それ自身が、武士の本質、即ち戦闘者としての強さの表現であったと結論付けられました。

#### 6. 李知宣先生（淑明女子大学校）

##### 「日本宮中公演芸術と文化コンテンツ」

李先生は、宮中公演芸術の中でも、特に雅楽に着目され、国を代表する公演文化としての価値があるとした一方では、一般大衆へのアピールが問題となっている、とご指摘なさいました。その上で、伝統的な雅楽の公演スタイルや、現代に合わせた変容の仕方、さらには国立劇場が行ってきた雅楽コンテンツの開発模様や、その事例を紹介してくださいました。ご発表の後半では、映画やドラマといったメディアと結合した、親しみやすい

雅楽コンテンツの形を、実際に映像を流しながら示されました。

#### 7. Kristin Surak 先生（ロンドン大学 SOAS）

##### 「Making Tea, Making Japan

:Cultural Nationalism in Practice

お茶をたてる、日本をたてる

:文化ナショナリズムの実践」

Surak 先生は、外国人だけでなく、日本人までもが、日本に居ながら茶道に日本らしさを見いだすことに興味を抱かれました。そこで、家元制度といった茶道の説明や、その歴史、20世紀において特に女性に広まった日本らしさ（モラル、マナーなど）の解明、さらには、独自の調査に基づいた、現在の茶道における稽古の様子を紹介してくださいました。また、家元が権力と結びついていった事や、メディアとの関わりを通じて、彼らが日本文化の象徴として位置付けられていった事をご指摘なさいました。

#### 8. Florent Debouverie さん（パリ第七大学）

##### 「平戸藩における山鹿流兵学の受容過程

##### —問題提起と研究方法—

Debouverie さんは、兵学を「太平の世における武士が、己のアイデンティティを掴むために追求した固有の学問である」と見なす立場から、山鹿流兵学の受容に関して、詳細な過程を示されました。平戸藩（現在の長崎県）に多く現存する資料を紹介くださった他、「社会変容に携わった思想としての山鹿流兵学が、平戸藩においてどのように受容されたのか」を解明する為の研究手法を明らかになさいました。

どの発表においても、質疑応答や研究のアドバイスが活発に行われ、大変有意義な会になりました。以上で日本文化部会 I の報告を終わります。